

=====

CONTENTS

- 巻頭言
- 特集：2012年度全国学術大会報告
- 事務報告
- 役員体制（2012年度-2014年度）
- 関東部会定例研究会「莫言と同時代文学」報告
- 関西部会主催「日中関係を考える講演会」報告
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌
- 学術賞受賞者紹介
- そのほか

=====

■ 巻頭言

2012-2014年理事長としてのごあいさつ

理事長 高見澤磨

2012年秋の一橋大学での全国学術大会終了後から2014年秋の全国学術大会までの理事長をおおせつかりました。一橋大学での総会には、所属大学の用務にて欠席し、失礼いたしました。ニューズレターのおかりして改めてごあいさつさせていただきます。

学会のホームページをご覧くださいと「学会概要」という欄があり、ここには「日本現代中国学会の沿革と概要」という文書があります。本来ならば、このごあいさつとは別にこの部分も理事長として執筆すべきところですが、瀬戸宏前理事長がかなり詳細な文章を作ってくださっているので、私としては、これに若干手をいれさせていただき、かなりを流用させていただく形にしました。とは申しましても、他の方の文章に手を入れるというのは気を遣う作業です。まずは、気を遣わずに済んだ部分についてご報告申し上げます。

「3、組織」の「学会の機構」という部分で、2012年に東海部会が設立されたことを加えました。当面は、愛知・岐阜・三重・静岡の4県をその範囲とすることになるかと思えます。この地域に所属先や住所・居所をお持ちの方は、東海部会を活動の場として活用していただきたく思います。また、部会の区域は領土・縄張りの類ではありませんので、他の部会の活動にも気軽にご参加いただき、また、他の部会の方も東海部会の活動にご参加いただければと思います。

所属先や住所など連絡先に変更の生じた方は事務局にご連絡いただくこととなっていますが、とくに部会の範囲を超えて変更が生じた方には、それぞれ関連する部会にもご連絡いた

できれば幸いです。役員任期中にこうした変更が生じた場合もあり得ることでありますが、この場合の対処については今期の理事会で話し合っておきたいと思っております。

気を遣った部分は、「会員・会費と入会」の部分です。普通会員年会費 5000 円、団体会員年会費 6000 円を紹介したあとで、「現在では、最も会費の安い学会の一つとなっています。」という一文がありました。このこと自体はまさにそのとおりなのですが、この部分は削除させていただきました。現在学会の繰り越し額は 200 万円を切るところになり、概ね『現代中国』1 号分の額の余裕しかありません。現在の収入・支出構造ではこれが毎年さらに減ることになっています。今期理事会ではこの点についての検討と改善とを行う必要があります。支出を削減するにしても収入を増加させるにしても会員の皆様のご理解が必要になります。まずは常任理事会にて検討を開始します。

「4、学会の当面する課題」については文書は若干変えさせていただきましたが、趣旨は変わりません。その趣旨とは、学会における研究活動の質の維持・向上が重要なこと、そのことがときに難しい問題を生じている日中関係を冷静に考える場としての学会の価値を維持・向上させることの 2 点です。本学会の会員は直接に中国に学術上の仲間を持ち、たぶん中国側の研究者も私達を仲間とってくれているでしょう。こうした具体的な生身の人間同士のつきあいがあれば、日本にも中国にもいろいろな人がいるのだ、という単純な道理を共有することができ、政治家の不適切な発言や激情にかられた人々の言動があっても「いろいろ」のうちに頭でも心でも処理できるはずです。

私たちは、世界第二の経済大国になったばかりの中国を観察できるという極めておもしろい立場にあります。このことについて精密な現状分析することも地球規模で数百年の長さを以て人類史の観点から論じること本学会にとって可能なことです。そうした研究成果を全国学術大会、部会活動、『現代中国』などで勉強させていただくことを楽しみにしております。

■ 特集：2012 年度全国学術大会報告

2012 年 10 月 20 日、21 日の 2 日間にわたり、一橋大学にて第 62 回全国学術大会が開催されました。共通論題、各部会・分科会の責任者より総括をいただきましたので、特集として掲載いたします。

【共通論題】

テーマは「中国社会とメディア・コミュニケーション」（参加者は約 140 名）、①羅崗（華東師範大学）氏「インターネット空間と現代中国社会の転型——中国における「人力検索」とネット民意の要求」石井剛氏（東京大学）、②岩間一弘（千葉商科大学）会員「20 世紀上海の観光都市化と日本人観光客のシノワズリ」、③田嶋淳子（法政大学）氏「グローバル化の中の中国系エスニック・メディア：ローカル・ナショナル・トランスナショナルからの視点」の報告と、松浦恆雄（大阪市立大学）・阿古智子（早稲田大学）両会員の討論で構成。上海在住の羅崗氏が渡日できず、パワー・ポイントを主に質疑応答でスカイプ音声・画像を使用するという新たな試みを行った。ネット空間には悲観的・楽観的な見方があるが、2010 年のトップ流行語ともなった「私の父は李剛」事件における中国式の「人力検索」と腐敗摘発との関連を主にとりあげ、官僚の監督や不正行為摘発のための民意表現の武器となっている現実

を指摘した。そこで中国の「ネット公共空間」を構成する前提として匿名性の重要性が論じられた。②は租界地として発達、テーマ・パーク化にいたる観光都市上海について、20世紀前と改革開放期をつなぐ歴史的な視点、「(再)魔術(非日常)化」、新「シノワズリ」という視点にジェンダーの要素をも加えて、メディアを通じた社会変容と連続性を周到に分析した。③は主に日本への中国系新旧移住者とそのメディア空間のローカル、エスニックからナショナルへ、さらにトランスナショナル、グローカルな情報ネットワークへと展開してきた変容の様相を、興味深いデータを多用して国際社会学的に分析、グローバル化の進展で移住先でも日中双方の情報が即座に入手可能なことから社会統合へ向けた普遍化と特殊化もおきていることを指摘した。こうした変容について文学の低落とネット公共空間性への疑問、匿名性の陥穽などが活発に討論された。[記：(司会)坂元ひろ子会員]

【特別分科会1・文学】(約50名)特別分科会(文学)では、坂井洋史(一橋大学)の趣旨説明の後、3つの報告が行われた。①郭春林(上海大学)「80年代農村小説に見える脱集団化叙述—高曉声を例に」は、三農問題の歴史的な文脈を回顧し、工業化を目指す国家が農民を搾取する必要性を、歴史の「残酷」と捉え直す視点から、高曉声の農村テーマ小説を分析、80年代の農村小説は貧困の原因を社会主義の集団化に帰して、却って問題を単純化したと主張した(郭氏からの提供原稿を譚仁岸氏(一橋大学・院)が翻訳、代読)。②許司未(一橋大学・院)「脱一元化の主体——張承志作品の中の民族と国家」は、80~90年代の張承志における、元知識青年から世界中のムスリム/マイノリティのために発言する知識人へという、アイデンティティ変化の転換点として、小説『金牧場』から『金草地』への書き直しに着眼した。小説における民族国家の表象を、テキストに対する疎外として疑問視し始めたことで、張はインターナショナルな主体性確立に踏み込んだとの見解を示した。③鈴木将久(明治大学)「ポスト文革時代における「政治と文学」—「胡風名誉回復」を文学史的に考える」は、80年代に段階的に進められた胡風の名誉回復を読み解こうとした。80年代の「啓蒙言説」のもと、胡風は「五四啓蒙」を堅持した文学者として再評価されたが、胡風のテキストは「啓蒙言説」に収まるものではなく、その読解を通じて、「文学史の書き換え」など新しい文学史研究が生み出された。さらに、その背景には、胡風テキストを保存する努力があったことを指摘した。[記：坂井洋史会員]

【特別分科会2・政治経済】(中国の土地と不動産の政治経済学)(約30名)①梶谷懐「農地転用と地方政府による『制度間競争』——転換期を迎えた土地政策」/②中岡深雪(北九州市立大学)「住宅・不動産価格の高騰に関する考察」/③松村嘉久(阪南大学)「オリンピックは北京をどう変えたのか？」

中国の都市化の進展は不動産業のビジネスチャンスと利権をもたらし、腐敗の温床ともなっている。本分科会では様々な角度から土地と不動産の問題を検討した。①は、都市近郊の農地を工業用地や住宅地に転用する際に生じるレントを公(地方政府)と私(農民)と集団(村)で分ける仕組みの変遷をたどった。当初は地方政府がレントを独占していたが、2008年以降は集団と私の自主性と利益を尊重する制度が各地で打ち出され、制度間競争の様相を見せていることを指摘した。②は、計画経済時代には実物として供給されていた住宅が1990年代に商品化され、今日の住宅価格高騰につながっていった経緯を追った。低所得者の住宅

確保をサポートする福祉政策がなかなか機能せず、住宅格差が深刻化しているという。③は、北京市のスラムを豊富な写真とともに紹介した。北京には500万人以上の外来人口が常住し、スラムができるのは必然的とも言えるが、市政府はそれを物理的に隠蔽し、撤去し、認識上も「スラム」と認めていない。報告はスラムを直視する必要性を訴えた。[記：丸川知雄会員]

【特別分科会3・映画メディア—中国研究と映画メディア】(企画・司会 晏妮(明治学院大学・非)討論:白井啓介(文教大学)、菅原慶乃(関西大学)、晏妮 来聴者約30名) ①応雄(北海道大学)「ロウ・イエ映画における空間表現」/②張新民(大阪市立大学)「淪陥期の華北電影の巡回上映に関する一考察」/③韓燕麗(関西学院大学)「戦時中の重慶における官営撮影所の映画製作について」 ①は、ポスト第五世代の映画作家ロウ・イエの近作『天安門、恋人たち』と『スプリング・フィーバー』における空間と人物の身体性に焦点を絞り、従来の映画における遠近法を打破して、人物を至近距離で捉え、空間とぶつかりあうようなロウ・イエの斬新な映像手法を映像テキストに沿って丹念に分析した。②は、資料を博搜しつつ、日本主導の「華北電影」が淪陥期に行った巡回映画上映の経緯を詳細な史資料によって実証し、巡回上映時の製作制定、上映の在り方及び受容側の実態を綿密に考察した報告であった。③は、国民党政府による「電影出国」の政策のもとで、戦時中の重慶における官営撮影所の製作と作品の海外への輸出の実態を明かした上で、当時の代表作『東亜之光』や『日本間諜』を取り上げ、そこに表象された日本人のイメージ、キャラクターの人間性と日本文化の要素を逐一分析し、これまで先行研究に言及されなかった問題を提起した。質疑では、①に対して、ロウ・イエ作品の編集術にみられる時間の捉え方に留意すべきだと指摘、②に対して、満映が行った巡回上映を華北電影と比較しつつ、華北電影の作品の供給源及び配給先を付け加えた。③に対して、『東亜之光』における日本人キャラクターの涙を流すシーンなどを直ちに彼らの人間性と分析するのではなく、むしろ彼らが改心したようなプロパガンダ的な表現ではないかというコメントがあった。会場からは、①が指摘したロウ・イエが捉えた「美しい身体」とチャン・イーモウが撮り続けてきた女性の美しい姿との違いに対する質問があり、また③のコメントに同調するような感想も述べられた。[記：晏妮会員]

【特別分科会4・現代思想】 ①園田茂人(東京大学)「北京コンセンサス」とアジア史の自己主張」/②石井知章(明治大学)「前近代の隠蔽をもたらすパラダイム——G・アリギの『北京のアダム・スミス』を読んで」/③與那覇潤(愛知県立大学)「中国化するアダム・スミス——比較近世論のなかのジョヴァンニ・アリギ」 ①は、アリギの著書が中国大陸の世界システム論再定義を促す中、現代中国のそうした言説は、実はアジア不在のまま社会主義に関する考察を棚上げしながら進行したことに注意を促した。「北京コンセンサス」が含意するアジアや普遍性の問題について質疑がなされた。②は、アジア的前近代性の克服という中国革命の主張を隠蔽する新左派の言説に、アリギが無批判に依拠している問題点を指摘した。アジア的なものの革命以外に近代革命として中国革命を評価する可能性をめぐって討論がなされた。③は、身分的には自由だが思想的に不自由であった中国と、その逆の日本という2つのモデルの内、ポスト資本主義により適合的な中国モデルが、アリギの世界システム論を支えていると主張した。中国の道徳イデオロギー的な秩序観は今後のモデルたり得るかという方向にフロアの議論は展開した。中山智香子は、監訳者の立場から、合意的コンセンサスによ

る世界システム構築を模索したアリギが著書で最後に見出したのが、市場経済に基づく中国モデルに他ならないとコメントした。[記：緒形康会員]

【特別分科会 5・ジェンダー】(約 60 名) ①姚毅(東京大学・非常勤)「伝統の現出とジェンダー秩序の再編—産婦人科女医養成を例に」／②濱田麻矢(神戸大学)「生育は女の絆をどう変えるか—王安憶の描くレズビアン連続体」／③小浜正子(日本大学)「生育の医療化・国家化と家族の絆—「一人っ子政策」と母系家族の顕現」／分科会企画者の小浜より、中国研究の各領域にジェンダー視点を導入する必要性が提起された後、①では、「中国の産婦人科医には女医が圧倒的に多いのはなぜか」という問題について、「男女有別」の伝統規範やそれと対立する「男女平等」の言説等が、政治と医療実践の現場で複雑な作用を見せながら産婦人科の女性化を導いた過程をたどり、「現代伝統」の概念でこれを理解しようとした。②は、「生み育てる」行為が女性同士の連帯におよぼす影響を、A・リッチの「レズビアン連続体」の概念を用いつつ王安憶『弟兄們』(1989)を中心に現代小説の中に探り、異性愛への抵抗措置としてのレズビアン連続体が、「母性」によって崩壊する様子を見た。③は、計画出産による少子化の中で生育観念が変わり、母子のケアのネットワークや家族関係が地域による偏差を伴いながら変化してきたという調査結果から、生育の医療化・国家化・商業化がジェンダー秩序を変容させる状況が紹介された。高嶋航氏(京都大学)によるコメントや会場からの意見では、男性の視点による「生育」への問い直しも提起され、限られた時間ながら密度の濃い議論が交わされた。[記：小浜正子会員]

【自由論題 A・思想史】(約 20 名) ①吉川次郎(中京大学)「雲南出身知識人李根源(1879-1965)を軸にみる中華民国初期の中心と周縁」(中京大学・吉川次郎)／②原正人(中央大学)「研究系と五四運動」、森川裕貫(日本学術振興会特別研究員 PD)「民主と独裁をめぐる論戦における張東蓀の論理」、竹元規人(福岡教育大学)「清華学派」再考——1930 年代の国立清華大学文学院」。①は「周縁」に出自をもつ知識人の活動から近代中国の「中央」で起きていたダイナミックな動きを相対化したものである。雲南におけるベトナム要因をどのように加味すればいいのかについて議論があった。②は五四運動に果たした研究系の役割をそのメディア活動から再評価したものである。この報告でいうメディアの範囲とその影響力の差異、あるいは実際の外交に与えた影響力などについて議論があった。③は 1930 年代の張東蓀の民主化論を分析し、彼が胡適ら以上に自由を重視していたのではないかと問いかける。張の政治思想の真髓や彼の文化論をめぐって様々な議論が展開された。④は欧米色の強い清華大学にあって、本来その本流に位置していた文学院を詳細に考察したものである。当時から清華「学派」と呼ばれるような確たるまとまりが存在していたのかをめぐって議論が展開された。これらの活発な議論を通じて、各報告者が、それぞれの立場から思想史の方法論を深化させ、それぞれの報告を中国近現代史という広い水脈の中に位置づけていくことを大いに期待したい。[記：中村元哉会員]

【自由論題 B・エスニシティ】(約 20 名) ①ボヤント(桐蔭横浜大学・院)「内モンゴル東部地域における「民族分裂案件」の実態----ホルチン左翼後旗を中心として----」／②暁剛(明治大学・院)「内モンゴル東部地域における草地開墾と漢族移民----ホルチン左翼後旗を事例と

して----」／③西野可奈（東京工業大学）「1930年代中国社会学における「人種」概念」。①では、内モンゴル自治区における漢人移民の増加と開墾等の結果、1960年代前半にモンゴル人の反発が噴出したことを、中等教育の場での事例から明らかにした。抗議に関わった学生の出身階層について質疑がなされ、モンゴル人の不満が旧支配層に関係なく一般的であったことが示された。②は、中共中央と内モンゴル自治区政府が末端の行政組織に開墾可能地の調査を指示した際、末端は意図的に少ない数字を報告した事例を通じ、1950年代における中央＝地方関係の駆け引きや一定程度の「自由」を明らかにした。また、今日の開発区設置や開墾による生態環境の乱れについて意見が交わされた。③は「中華民族」「中国社会」意識の形成をめぐる民国期人種論・社会人類学の展開を、潘光旦の優生学的思考に対し批判的な孫本文を通じて考察し、孫本文は「社会」の可変性を重視して中国社会に潜む問題の発掘を志向したことを明らかにした。質疑では、エリートによる問題発掘という意識がエリート主義的支配に転化し、少数民族問題にも影響を及ぼしたという見取り図が示された。[記・平野聡会員]

【自由論題 C・政治経済 I】（約 25 名）①下野寿子（北九州市立大学）「改革開放期における福建省内の対台工作に関する一考察」／②大西広（慶應義塾大学）「中越国境から見た中越関係」／③日吉秀松（日本大学）『『二月逆流』と毛沢東の陰謀』④張利軍（中共中央編訳局、中央大学客員研究員）「なぜ中国共産党は冷戦から今日まで持続しているのか—政治参加を中心にして」。①は、福建省は全国に先駆けて対外開放地域に指定されたのに、台湾資本の誘致や経済発展で、珠江と長江デルタに大きく後れを取り、その原因について两岸関係、中央地方関係、経済要素を政治経済学的に検討し、地方政府の自主性と限界を分析した。質疑応答では、省の指導力や省内南北地域間の葛藤等について討論された。②は、現地視察を報告し、中越関係の歴史と現在を踏まえて安全保障と経済発展のジレンマを分析して指摘した。質疑応答は歴史の記憶と現在の中越関係との相関を中心に活発な議論を繰り広げた。③は、文革中の「二月逆流」は党・軍長老からの文革政策への反撃ではなく、毛沢東からの求めがあったの批判発言であり、毛沢東が党・軍長老を打倒するための陰謀であったことを報告した。質疑は史料の確認に集中し、多くの公刊史料が確認された。④は中共中央編訳局・北京大学・アメリカアジア基金「中国ガバナンス研究グループ」による研究の中間成果の一部を報告し、中共の統治の持続と政治参加の改善との相関を証明したとした。質疑は各諸変数及び説明の適切性を巡って活発に行われた。なお重慶、四川、江蘇に対するケース・スタディの結果、重慶だけが「政治参加は活発で、社会政策・法律の違反の比率は相対的に低い」という点について、重慶モデルと薄熙来事件を踏まえた議論も行われた。[記・趙宏偉会員]

【自由論題 D・文学】（座長：白水紀子、約 45 名）①高峽（日本学術振興会特別研究員 PD）『『駱駝祥子』における北京の時空間について』／②天神裕子（お茶の水女子大学・院）「『遷台』女性作家が描いた“理想の家庭”言説——『中央日報』「婦女与家庭」より」／③栗山千香子（中央大学）「消された物語——梅娘『蟹』の改作問題および新たな読み方の可能性について」／④河村昌子（明海大学）「高行健『一個人的聖經』における語りの特徴——残された一人称」

①は、バフチンのクロノトポスという概念を用いて『駱駝祥子』の分析を試みたもの。時間

不足のために具体的な論証部分の報告が途中で終わったのは残念だった。②は、『中央日報』「婦女与家庭」欄をテキストとして、遷台女性作家の「家庭」概念を論じたもの。これらに描かれる「良妻賢母像」「円満な家庭像」をどう解釈するかが今後の課題として指摘された。③は、『蟹』を「翠の物語」として読むことの可能性と、翠が語る「偉大な女性の物語」の由来について一つの仮説を述べ、近年の改作によりこの場面が削除されてしまった事実と、その意味について検証したもの。フロアから、「偉大な女性の物語」のモデルとされるロシア映画が、改作当時の中国でどのように見られていたかの紹介があり、梅娘の改作をめぐる議論が更に深まった。④は、一人称の回避という特徴的な人称の使い方をする高行健の作品のなかで、『一個人的聖經』では許倩との会話部分で相対的に多用されることに注目し、いまだ客観視できていない高行健の文革体験の核心を見ようとしたもの。これまでの言語分析的研究の成果をもとに本作品をポスト文化大革命時代の文学作品として読み解こうとする新たな研究視点が提示された。[記：白水紀子会員]

【自由論題 E・歴史】(約 15 名) ①小野泰教(東京大学)「郭嵩燾の風俗観念と西洋政治制度—議会制、学会組織を中心に—」／②黒川由希(名古屋大学・院)「王韜『淞濱瑣話』『漫游随録図記』から見る清末文人の女性像・女性観」／③劉珊珊(上智大学・院)「清末新政期の「毀学」風潮」／④鈴木航(一橋大学・院)「戦地記者としての曹聚仁—中国ジャーナリストの近代性をめぐって—」

①は、従来、イギリスの議会制民主主義に対する「理解度」が論じられてきた郭嵩燾について、むしろ郭自身の問題意識の所在に即してそのイギリス論を読み解いた。「風俗」がそのキーワードとなる。②は、王韜が『淞濱瑣話』に記したような妓女との交流の経験が、その後、彼の女性観・女性論に影響を与えたことを、とくに『漫游随録図記』にみえる彼のイギリス紀行に基づいて指摘しようとした。③は、清末新政時期に民衆が新式の学堂を破壊した多数の事件について当時の新聞・雑誌記事をもとに分析し、その背後にある原因を考察しようとした。④は、日中戦争時期に戦地記者として活躍した曹聚仁について論じた。曹が自己の活動を省察するなかで、政治化ないし商業化したメディアのありかたに対する懐疑を抱き、ジャーナリズムの可能性を模索する過程について、明晰な分析が示された。[記：吉澤誠一郎会員]

【自由論題 F・政治経済Ⅱ】(約 25 名) ①聶海松(東京農工大学)「中国の人口高齢化と社会的現実」／②于蓉蓉(東京農業大学・院)「中国の『退耕還林』政策実施後における山村発展の現状と課題」／③吉川純恵(早稲田大学・院)「中国と WTO—グローバルスタンダードへの接近と国内改革—」

①は、マクロ・データを用いた人口動態分析、中国 5 地区において 60 歳以上の高齢者を対象に行ったアンケート調査の分析、および一人っ子政策の緩和をめぐる諸動向に関する検討を行った。中国の人口高齢化問題に関する幅広い報告であり、今後の一人っ子政策の展望などについて、フロアから活発な質問が出された。②は、山西省婁煩県で行った実態調査に基づき、貧困山村における農業開発の事例を紹介した。報告者は、農村社会開発における人的ネットワークの重要性を主張したいようであるが、そのためにはもう少し具体的な分析を行ってほしかった。フロアからは、農業以外の産業の分析も必要だとのコメントがあった。

③は、中国の WTO 加盟までのプロセス、WTO 加盟後の中国の国内制度改革、および中国加盟後の WTO の変化についての検討を行った。先行研究をよく勉強しており、全体として違和感のない報告であった。フロアーから、WTO 加盟時の許諾条件や WTO 加盟が国内制度改革に与えた影響等に関する、より具体的な分析を期待する趣旨のコメントがあった。[記：池上彰英会員]

【自由論題 G・文学 2】(約 30 名) ①秋吉収 (九州大学)「魯迅の散文詩集『野草』における周作人、佐藤春夫の影響」／②伊藤徳也 (東京大学)「北斗生「支那文壇無駄話」を周作人の逸文として読む」／③西槇偉 (熊本大学)「師弟関係の物語——豊子愷『教師日記』とハーン『英語教師の日記』とアミーチス『クオーレ』をめぐって——」／④徐曉紅 (東京大学・院)「未亡人の叫び——施蛰存、ハムスン、シュニツラーの作品を中心に——」

①は、魯迅『野草』の創作に影響を与えた可能性のある佐藤春夫の散文詩や文章を紹介し、『野草』の読みに新しい視角を与えた。発表者には『野草』の「深刻さ」に疑義を呈する意向があるようだが、魯迅の終末論的立ち位置が佐藤や周作人にありうるのか、問題となろう。②は、日本語で書かれた逸文「無駄話」における中国文壇の率直な評価を確認し、周作人が「耽美派」と区別した「頽廢派」に新しい意味をもたせ、合わせて文学を自己目的化する彼の観点が強調されたとする。周における生と政治との関連がやや気になった。③は豊子愷の教師日記文学を、西洋の同種の文学と関連させ、国民教育の教科書として共通性を見出すとともに、豊子愷が師弟関係の伝統的意味を再認識したとする。師弟愛をそのまま孔子的なものに捉えられるどうかをキーポイントであろう。④は、施蛰存が描いた未亡人の描写をもとに、中国文学史における性愛描写の変化と合わせ、西洋文学との受容比較を行った。さらに「受容」について、受け手の主体性を重視する方法を主張したが、文学的内面自体が輸入されたのでは、という会場からの指摘があった。[記：代田智明会員]

【自由論題 H・社会文化】(約 30 名) ①楊麗君 (シンガポール国立大学)：韓寒と中国の公共空間。②牧陽一 (埼玉大学)：艾未未とボディー・メディア、自由空間。③張広帥 (北海道大学・院)：「郷村観光」による農民の自律性形成に関する研究。④西本紫乃 (広島大学・院)：Web.2.0 時代の民間のソーシャル・ネットワークと相互扶助——広東省における公益活動の事例研究——。①は、中国社会に影響を与え続けている韓寒のブログについての紹介と分析。2006 年から現在までの発言を整理し、民主・ナショナリズム・社会批判・政府批判など、いくつかのカテゴリーに分けて、その特徴や、社会、政府の反応について検討された。②は、艾未未の、主に 2000 年以降の活動の内容と特徴についての紹介と分析。芸術活動と社会・政府批判が一体となっている艾未未の近年の動向について、報告者との交流も交えて素描された。③は、大連郊外の金溝村における郷村観光の取り組みに関する調査報告と分析。農村の自立の試みとしての観光事業と、政府の役割、その成果・問題点などが紹介された。④は、広東省における NGO 活動についての実態調査の報告と、問題点の分析。ソーシャルネットワークを多用して活動を展開している現状や、政府との関係、直面する問題などについて紹介、検討がなされた。いずれもヴィヴィッドな中国の現在に切り込んだ報告で、会場からも多岐にわたる質問や意見が出て、活気あるセッションとなった。広い領域にわたる報告だったが、大衆の「動員」という視点から見れば、そのシステムが共通して大きく転回しつつある現状

が浮かび上がり、興味深い議論が展開された。[記：千野拓政会員]

■ 事務報告

□2012年度理事会（2010-2012）議事録

日時：2012年10月20日（土）10：00～11：30

場所：一橋大学・マーキュリータワー7階・会議室（A）

冒頭に、瀬戸理事長よりこの一年間学会活動が活発に行われた旨の挨拶があった。

【報告事項】

1. 会務報告（事務局長）

辻事務局長より以下の会務報告が行われた。

1) 経過（ニューズレター、学会HP掲載事項は省略）

- ・2012年度事業計画内容は全て順調に実行され、本年も質の高い学会活動を行うことができた。
- ・常任理事会は学会の日常の意思決定機関として機能している。2月、7月の二回の常任理事会は、2012年全国大会開催校が関東であるため、関東で開催した。その他、随時常任理事会メーリングリスト、理事会メーリングリストで意見交換を行った。
- ・6月20日締切で理事選挙を行い、7月7日に関西で開票作業を行った。

2) 組織実勢

- ・会員数は、2012年9月30日現在、個人会員709名、5団体会員（昨年同期709名、5団体）。
- ・新規会員31名（昨年56名）、復会会員3名（同4名）、退会者34名（同27名）。2009年度4名増、2010年度15名増、2011年度33名増と会員数の拡大が続いてきたが、2012年度は増減なしであった。

3) 財務状況（詳細は会計報告で）

- ・2011年度の会費納入割合は81.4%であったが、今年度は84.6%に上昇した。
- ・会費納入率が上がり、会費収入が約30万円増加した。また、2011・12年に学術振興会・研究成果公開促進費を申請・承諾され、180万円の収入増加となった（12年度会計に二年分を計上）。それを原資に、学会会誌作成費用二年分（85号・86号）を12年度で精算した。12年度は、名簿作成や理事選挙の実施、また、常任理事会交通費の増加などにより大幅な赤字となった。
- ・現中学会の会費は1995年に現在の5000円に改定されて以来値上げされていない。大幅な繰越金の減少が続いており、会費改定を真剣に検討すべき時期になっているように思われる。

2. 会計報告（会計）

北川会計担当理事より、資料に基づき以下のような会計報告がおこなわれた。

収入面では、科研費二年分を計上したことなどにより、約90万円の収入増であった。他方支出面は、学会誌二号分（85・86号）を支出したため、予算より約160万円の支出増となり、また、常任理事会交通費が36万円増となったため、約120万円の赤字となった。86号はページ数が増え、また校正をこれまでの一回から二回としたため作成費が上昇したが、学術誌としての品質を保つためには必要なコストであり、また、常任理事会交通費の大幅な上昇は常任理事会への活発な参加があったことによる。これら経費の削減は難しく、今後、他項目

での経費削減が必要である。また、同時に会費の値上げについても考える時期である。

3. 地域部会報告（関東・関西・西日本部会代表）

趙宏偉関東部会代表、日野みどり関西部会代表、新谷秀明西日本部会代表より、各地域部会の活動報告がおこなわれた。各部会研究活動についてはニューズレター参照のこと。

4. 編集委員会報告（事務局長）

敝編集委員長より『現代中国』第86号の編集報告がおこなわれた。次号も創土社から出版する旨の報告があり、出版社・編集委員会・執筆者間で編集作業が滞りなく進むよう、実態に合わせた執筆要綱の改定が提案された。委員長より口頭で改定部分の説明があったが、現理事会メーリングリストでの審議に回すことになった（その後、メーリングリストに審議事項として挙げられ、承認された）。また、太田賞を現編集委員会から推薦すること、および「論文」と「研究ノート」の区別についての審議を次期編集委員会に引き継ぐことなど報告された。

5. 広報委員会報告（幹事）

大澤武司ニューズレター担当幹事よりニューズレター第35～37号が順調に発行された旨の報告があった。また、第36号より地域部会大会・研究集会・研究会に関する報告が掲載され、学術賞受賞会員の紹介も第37号より掲載することになったことが併せて報告された。王雪萍HP担当幹事よりも学会ホームページが順調に管理されており、会員告知板が拡大している旨、報告された。但し、会員告知板には掲載基準がなく、研究情報を充実させるためにも学会情報版のようなものを作る必要性が報告された。

6. その他

特に報告はなかった。

【審議事項】

1. 新入会員承認

新入会員（関西部会3名、関東部会8名）11名が承認された。

2. 事業計画案（事務局長）

辻事務局長より以下の事業計画案が提案され、討議の結果、決定した。

1) 来年度全国大会

会場校は福岡大学、開催日時は2013年10月26・27日（第4土・日）とする（アジア政経学会には日程通知済み）。間ふさこ理事（福岡大学）を中心に実行委員会を組織する。

2) 編集・広報活動

『現代中国』87号を編集・発行する。具体的内容は編集委員会に一任する。広報委員会が中心となり、ニューズレター（年三回）を発行し、学会ホームページの充実に努める。

3) 地域部会の活動奨励

3. 予算案

北川会計理事より提案があり、討議の結果、総会に提出することを決定した。

4. 各種内規の決定について（組織検討委員長）

通山組織検討委員長より「日本現代中国学会顧問規定」、「常任理事会申し合わせ」および「理事長・事務局長および全国学術大会についての理事会覚書」が提案され、承認された

5. 東海部会(仮称)の設立について（砂山理事）

東海部会設立準備委員会・砂山理事より、東海部会設立の経緯が説明された。7月の愛知・三重・岐阜及び静岡県居住もしくは勤務先のある会員へのアンケート調査の結果、積極的に協力する会員が多数を占め、新部会設立は十分可能であるとの見解が示された。審議の結果、新年度より、愛知・三重・岐阜及び静岡県を範囲とした東海部会を立ち上げることになった。

6. 役員関係

1) 顧問の総会への推薦

審議の結果、近藤邦康氏、野村浩一氏、山田敬三氏、高橋満氏を引き続き顧問として推薦することとなった。また、新たに西村幸次郎氏および毛里和子氏を推薦することとなった。

2) 会計監査の総会への推薦

審議の結果、家永真幸氏（東京医科歯科大学）および眞殿仁美氏（九州看護福祉大学）を会計監査として推薦することとなった。

3) 次期理事長の新理事会への推薦

瀬戸理事長より、常任理事会で次期理事長に高見澤磨氏（東京大学）を決定した旨の報告があり、高見澤磨氏を新理事会に理事長候補として推薦することになった。

7. その他・総会準備

総会準備として、議長候補者の推薦を事務局長に一任することになった（その後、白水紀子理事（横浜国立大学）および王雪萍幹事（東京大学）を総会議長候補者となった）。

8. 次期開催校挨拶

福岡大学・間ふさこ理事より挨拶があった。

□2012年度 新理事会（2012-2014）議事録

1. 次期（2012-2014）理事長候補者の推薦（理事長）

瀬戸宏理事長より、次期理事長に高見澤磨会員（東京大学）を推薦する提案があり、審議の結果、承認した。

2. 次期常任理事会構成（新理事長）

高見澤新理事長より、次期常任理事会構成員の提案があり、審議の結果、承認した。一部の空席については、次期常任理事会に承認を委託した。また、常任理事・会計監査以外の委員等についても提案があり、入会状況を確認し、また、提案に含まれていない場合にはさらに各部会・委員会にて検討して事務局に報告して新役員体制を整えることとした。

☆常任理事会

理事長：高見澤 磨（東京大学）

副理事長：日野 みどり（同志社大学）

事務局長：川島 真（東京大学）

関東部会代表：趙 宏偉（法政大学）

関西部会代表：辻 美代（流通科学大学）

西日本部会代表：新谷秀明（西南学院大学）

東海部会代表：未定

編集委員長：大西 宏（慶應義塾大学）

広報委員長：大澤 武司（熊本学園大学）

会計：阿古 智子（早稲田大学）

オブザーバー

組織検討委員長：通山 昭治（九州国際大学）

開催校代表 2012年：一橋大学（坂元 ひろ子）

2013年：福岡大学（間 ふさこ）

2014年：神奈川大学（孫 安石）

☆会計監査

家永 真幸（東京医科歯科大学）

眞殿 仁美（九州看護福祉大学）

3. その他

特に提案はなかった。

□2012年度総会議事録

日時：2012年10月20日（土）17：10～18：10

場所：一橋大学・マーキュリータワー7階 多目的ルーム（B）

* 理事会議事録と内容重複部分は省略。

白水紀子会員（横浜国立大学）および王雪萍会員（東京大学）を総会議長に選出した。瀬戸理事長よりこの一年間学会活動が活発に行われ、また、この二年間、会員の協力のもとで理事長としての任期が終えられたことに感謝する旨の挨拶があった。

【報告事項】

1. 会務報告

辻事務局長より、各専門委員会報告、各地域部会報告を会務報告に一本化し、報告がおこなわれた。

2. 会計報告

北川会計担当理事より、会計報告がおこなわれた。

3. 会計監査報告

中川涼司会計監査より、常任理事会交通費が嵩んでいる、他学会振り込みが二重になっていたの未払い金にあげた、との指摘があったが、会計は適正に運営されている旨の報告があった。

4. 各種内規の決定

辻事務局長より、「日本現代中国学会顧問規定」、「常任理事会申し合わせ」および「理事長・事務局長および全国学術大会についての理事会覚書」の制定について説明があり、理事会で承認・決定したことが報告された。近藤邦康顧問から「理事長・事務局長および全国学術大会についての理事会覚書」について、理事長・事務局担当理事の選出は、「東」と「西」の会員数を考慮して決めるべきではないか、との意見が寄せられた。辻事務局長から、この覚書は強い拘束力を持つものではなく、次期事務局に近藤顧問の意見を伝える旨の答弁があった。

5. その他

特に報告はなかった。

【日本現代中国学会内規（理事会で承認）】

1) 日本現代中国学会顧問規定

日本現代中国学会顧問規定

(設置・任期)

第1条 日本現代中国学会（以下、学会とする。）規約第10条第6号にもとづき、理事会に対して意見を述べ、理事会の諮問に応ずるため、顧問若干名を置く。任期は2年とする。

(推薦基準)

第2条 理事会が総会の承認を求めるために顧問を推薦するにあたり、以下の各号のうち、いずれかに該当することとする。但し、被推薦顧問の年齢は原則として満70歳以上とする。

1. 学会の発展のために特に功労があり、理事長又は事務局担当理事に就任した者
2. 学会の理事に通算8期以上就任した者
3. その他理事会が特に推薦する者

(改正)

第3条 この規定の改正は、理事会の承認を得なければならない。

付則 この規定は2012年10月20日から実施する。

2) 常任理事会申し合わせ

日本現代中国学会常任理事会に関する申し合わせ

第1条 (目的)

この申し合わせは日本現代中国学会（以下「本会」とする。）常任理事会について定めることを目的とする。

第2条 (常任理事会の構成)

本会の常任理事は理事長とともに常任理事会を構成して、理事長を補佐し、分担して常務を処理する。

2 常任理事は理事のなかから理事長が指名し、理事会の承認を得て決定する。

第3条 (副理事長・事務局担当理事の選任)

理事会は理事のなかから理事長の指名にもとづき、副理事長および事務局担当理事各1名を選任し、それらを常任理事とすることができる。

第4条 (副理事長の役割)

副理事長は理事長に事故があった場合、理事長の職務を代行するものとする。

第5条 (事務局担当理事の役割)

事務局担当理事は本会事務局の業務を統括する。

2 副理事長が選任されていないとき、事務局担当理事は理事長に事故があった場合、理事長の職務を代行するものとする。

第6条 (その他の常任理事の選任)

理事会は理事のなかから理事長の指名にもとづき、第2条および第3条に掲げる常任理事のほかに、以下の学会業務担当理事を選任し、それらを常任理事とすることができる。

- 一 地域ごとに部会が設けられている場合の各部会の代表
- 二 学会誌『現代中国』編集長
- 三 広報委員長
- 四 会計担当者
- 五 企画担当者

第7条 (オブザーバーの出席)

理事長は、以下の学会業務担当者を常任理事会にオブザーバーとして出席させることがで

きる。なお、オブザーバーは理事であることを要しないが、すべて会員であることを要する

- 一 全国学術大会の次回開催校代表
- 二 ニュースレター編集担当者
- 三 ホームページ管理担当者
- 四 理事長が必要と認めるその他の担当者

(2012年10月20日理事会決定)

3) 理事長・事務局長および全国学術大会についての理事会覚書

理事長・事務局長および全国学術大会についての理事会覚書

2005年の本会の規約改正により東京大学(駒場)が事務局を担うという体制から理事長が事務局を定める体制に移行したことに伴い、学会事務への参加と負担の公平を考慮するために、また、従来慣例として行われてきた全国学術大会の開催校依頼について慣例を明文化するために、この覚書を定める。

1, この覚書において「東」と称するのは、この覚書制定時における関東部会をいう。「西」と称するのは、関西部会および西日本部会をいう。

2, 理事長・事務局担当理事(以下「事務局長」という。)は原則として「東」と「西」で2期(4年)交代とする。

3, 事務局運営を円滑にするために会計担当者も上記2にあわせることが望ましい。

4, 全国学術大会は原則として年1回開催し、「東」と「西」が毎年交代で開催する。

5, 理事長経験者は、全国学術大会開催校としての実行委員となる場合を除き、学会役員担当の依頼があった場合には、理由を示すことなく断ることができる。

6, この覚書は、強い拘束力を持つものと解してはならない。学会における会員分布の変化または災害その他特段の事情がある場合には、上記1から5までの規定にかかわらず、学会運営に必要な柔軟な措置をとることができる。

*東海部会が10月20日に成立するときには、1の後段の文言を「西」と称するのは、関西部会、西日本部会及び東海部会をいう」に改める。

以上

【審議事項】

1. 事業計画案

辻事務局長より事業計画案の提案があり、審議の結果、承認された。

2. 予算案

北川会計理事より予算案の提案があり、審議の結果、承認された。

3. 東海部会の設立について

辻事務局長より東海部会設立の経緯について説明があり、理事会で審議・承認され、次期より東海部会を設立したいとの提案があった。審議の結果、承認され、東海部会が立ち上がることになった。

4. 役員関係

1)新理事長の報告

瀬戸理事長より、総会に先立ち開催された理事会を代表し、次期理事長に高見澤磨会員(東京大学)を推薦する提案があり、審議の結果、承認された。

2)新常任理事会の報告

高見澤磨新理事長に代わり日野みどり副理事長候補より、次期常任理事会構成員が提案され、承認された。一部の空席については、すでに成立した常任理事会に承認を委託した。

3)顧問選出

辻事務局長より、継続して野村浩一氏、近藤邦康氏、山田敬三氏、高橋満氏、そして新規に西村幸次郎氏と毛里和子氏を加えた7名を顧問に推薦したいとの提案があった。審議の結果、承認された。

4)会計監査選出

辻事務局長より、家永真幸氏（東京医科歯科大学）と眞殿仁美氏（九州看護福祉大学）を会計監査に推薦したいとの提案があった。審議の結果、承認された。

5. 次期開催校挨拶

2013年全国大会開催校を代表して、福岡大学の間ふさこ理事より挨拶があった。

以上

[記：辻美代会員]

■ 役員体制（2012年度-2014年度）

□常任理事会

理事長：高見澤磨（東京大学）

副理事長：日野みどり（同志社大学）

事務局長：川島真（東京大学）

会計：阿古智子（早稲田大学）

関東部会代表：趙宏偉（法政大学）

関西部会代表：辻美代（流通科学大学）

西日本部会代表：新谷秀明（西南学院大学）

東海部会代表：菊池一隆（愛知学院大学）

編集委員長：大西広（慶應義塾大学）

広報委員長：大澤武司（熊本学園大学）

(以上で常任理事会を構成、以下常任理事会オブザーバー)

開催校代表 2012年：一橋大学（坂元ひろ子）

2013年：福岡大学（間ふさ子）

2014年：神奈川大学（孫安石）

組織検討委員長：通山昭治（九州国際大学）

□理事 *地域部会別五十音順

【関東部会（二十五名）】

青山瑠妙（早稲田大学）、阿古智子（早稲田大学）、飯塚容（中央大学）、石塚迅（山梨大学）、伊藤徳也（東京大学）、内田知行（大東文化大学）、大西広（慶應義塾大学）、加茂具樹（慶應義塾大学）、川島真（東京大学）、国分良成（防衛大学校）、坂元ひろ子（一橋大学）、佐藤普美子（駒澤大学）、澤田ゆかり（東京外国語大学）、白水紀子（横浜国立大学）、鈴木賢（北海道大学）、園田茂人（東京大学）、孫安石（神奈川大学）、高原明生（東京大学）、高見澤磨（東京大学）、趙宏偉（法政大学）、土田哲夫（中央大学）、中村元哉（津田塾大学）、丸川知雄（東京大学）、宮尾正樹（お茶の水女子大学）、山本真（筑波大学）

【関西部会（十五名）】

内田尚孝（同志社大学）、宇野木洋（立命館大学）、王京濱（大阪産業大学）、梶谷懐（神戸大学）、加藤弘之（神戸大学）、北川秀樹（龍谷大学）、 巖善平（同志社大学）、佐々木信彰（関西大学）、瀬戸宏（摂南大学）、田中仁（大阪大学）、辻美代（流通科学大学）、西村正男（関西学院大学）、日野みどり（同志社大学）、松村嘉久（阪南大学）、矢野剛（京都大学）

【西日本部会（五名）】

間ふさ子（福岡大学）、大澤武司（熊本学園大学）、新谷秀明（西南学院大学）、通山昭治（九州国際大学）、松岡純子（長崎県立大学）

【東海部会（五名）】

宇田川幸則（名古屋大学）、菊池一隆（愛知学院大学）、黄英哲（愛知大学）、砂山幸雄（愛知大学）、三好章（愛知大学）

□編集委員会

【委員長】 大西広（慶應義塾大学）

【副委員長】 巖善平（同志社大学）

【委員】 杉浦康之（防衛省防衛研究所）、倉田徹（金沢大学）、宇田川幸則（名古屋大学）、王京濱（大阪産業大学）、金澤孝彰（和歌山大学）、徐一睿（慶應義塾大学）、奥村哲（首都大学東京）、大澤肇（中部大学）、山本真（筑波大学）、新谷秀明（西南学院大学）、楊暁文（名古屋大学）、小川利康（早稲田大学）、加島潤（横浜国立大学）

□関東部会事務局

【代表】 趙宏偉（法政大学）

【総務】 中村元哉（津田塾大学）

【事務局】 佐藤普美子（駒沢大学）、丸川知雄（東京大学）、大西広（慶應義塾大学）

□関西部会事務局

【代表】 辻美代（流通科学大学）

【総務】 北川秀樹（龍谷大学）

【事務局】 宇野木洋（立命館大学）、松村嘉久（阪南大学）、内田尚孝（同志社大学）、西村正男（関西学院大学）

【オブザーバー】 瀬戸宏（摂南大学）、日野みどり（同志社大学）

西日本部会事務局

【代表】 新谷秀明（西南学院大学）

【総務】 松岡純子（長崎県立大学）

【事務局】 通山昭治（九州国際大学）、大澤武司（熊本学園大学）、間ふさ子（福岡大学）

□東海部会事務局

【代表】 菊池一隆（愛知学院大学）

【総務】 三好章（愛知大学）

【事務局】 黄英哲（愛知大学）、宇田川幸則（名古屋大学）、砂山幸雄（愛知大学）

□広報委員会

【委員長】 大澤武司（熊本学園大学）

【副委員長】 王雪萍（東京大学）

【ニューズレター担当】 福田円（国士舘大学）

【ホームページ担当】 小嶋華津子（慶應義塾大学）

□組織検討委員会

【委員長】 通山昭治（九州国際大学）

【副委員長】 石塚迅（山梨大学）

【委員】 各部会代表

□企画委員会および学術大会実行委員会

・企画委員は、各部会代表、編集委員長、学術大会実行委員会または準備委員会の委員長からなり、開催地部会代表が委員長となる。

・学術大会実行委員会は開催校を中心に組織される。翌々年以降の開催校については準備委員会が組織される。

□会計監査

家永真幸（東京医科歯科大学）、真殿仁美（九州看護福祉大学）

□顧問

近藤邦康、高橋満、野村浩一、山田敬三、西村幸次郎、毛里和子

■ 関東部会定例研究会「莫言と同時代文学」報告

1月12（土）、法政大学市ヶ谷校舎58年館2階キャリア情報ルームにおいて、「莫言と同時代文学」というテーマで定例研究会が開催された。2012年10月ノーベル文学賞を受賞した莫言を掲げたテーマだったためか、参加者は40名に上り、午後2時からの会は予定時間を超過して5時10分に終了した。

第一報告では、2000年（高行健ノーベル文学賞受賞）以降の日本で、毎年中国文学の現況を紹介する『年鑑』二種の内容のあらましと近十年の主な翻訳状況が紹介された。またノーベル賞作品選考と切り離せない欧米言語への翻訳の問題も指摘された。第二報告では莫言文学の表現と方法の特色について、具体的テキストを通じた分析が示された。その特色の一つである「暴力の形象化」については、魯迅や趙樹理のプレテキストとの関わりなど興味深い指摘もなされた。第三報告では、『赤いコーリャン』をはじめ、莫言が映画化に関与したとされる作品の紹介、合わせて他の同時代作家の映画製作への関与の状況、芸術映画と純文学が相互依存せざるをえない背景も報告された。フロアとのやり取りも含め、本会は〈莫言〉をきっかけに中国同時代文学への様々な視角が提供される場となった。[記：佐藤普美子会員]

【報告者・報告タイトル】

第一報告：飯塚容（中央大）「高行健から莫言まで——2000年以降の中国文学の状況と日本での紹介」

第二報告：加藤三由紀（和光大）「莫言を語ることば——テキストの読みと批評を考える」

第三報告：白井啓介（文教大）「中国映画と文学の相依相存——『紅高粱』（1987）から『唐山大地震』（2010）まで」

■ 関西部会主催「日中関係を考える講演会」報告

2012年は日中国交回復40周年にもかかわらず、日中関係は最悪になっている、学会としてどう考えたらいいのか。このような問題意識でこの講演会は企画された。12月15日の講演会当日、龍谷大学梅田キャンパスの会場はほぼ満席となった。

毛里和子氏の約90分の講演（「2012日中衝突を考える」）は、2012年尖閣暴動の分析

から始まり、「愛国無罪」という言葉で暴力行為は許されるという考えは間違いだと強調した。次に、国交回復後40年間の日中関係を回顧し、再び現在に戻って日本人、中国人のそれぞれに対するイメージや中国の領土主張の原理化や中国の海外利益論・新海洋戦略などを紹介、分析した。そして、「日中新冷戦」を避けるために何をしたらいいか提起し、最後に日中学術交流強化の必要性を指摘した。90分が短く感じられた、という感想が参加者から出されるほどの充実した講演だった。その後のフロアとの質疑応答でも、真摯な質問が多数寄せられた。

関西部会では、講演会の成功を受けて、6月8日開催の関西部会大会でも再び日中関係を取りあげる予定である。[記：瀬戸宏会員]

■ 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌

□政治(政治史・軍隊)

- ・現代中国政治[第3版]-グローバル・パワーの肖像/毛里 和子 (2012/5/29) 名古屋大学出版会
- ・中国共産党の支配と権力: 党と新興の社会経済エリート/鈴木 隆 (2012/7/21) 慶應義塾大学出版会
- ・概説 近現代中国政治史/浅野 亮、川井 悟 (2012/7) ミネルヴァ書房
- ・中国革命と軍隊: 近代広東における党・軍・社会の関係/阿南 友亮 (2012/8/22) 慶應義塾大学出版会
- ・日中関係史 1972-2012 I 政治/高原 明生、服部 龍二 (2012/10/2) 東京大学出版会

□経済(経済史)

- ・圧縮された産業発展 -台湾ノートパソコン企業の成長メカニズム/川上 桃子 (2012/7/5) 名古屋大学出版会
- ・中国の食糧流通システム/池上 彰英 (2012/7) 御茶の水書房
- ・日中関係史 1972-2012 II 経済/服部 健治、丸川 知雄 (2012/9/1) 東京大学出版会
- ・中国経済史入門/久保 亨 (2012/9/21) 東京大学出版会
- ・中国の少数民族問題と経済格差/大西 広 (2012/9/18) 京都大学学術出版会
- ・開発経済学と現代中国/中兼 和津次 (2012/9/20) 名古屋大学出版会

□歴史

- ・日中関係史 1972-2012 III 社会・文化/園田 茂人 (2012/10/2) 東京大学出版会
- ・中国人口問題の年譜と統計: 1949-2012年/若林 敬子、聶 海松 (2012/12/7) 御茶の水書房
- ・中国の愛国と民主一章乃器とその時代/水羽 信男 (2012/11) 汲古選書
- ・香港 「帝国の時代」のゲートウェイ/久末 亮一 (2012/10/3) 名古屋大学出版会

□文学

- ・中国近代小説の成立と写実/森岡 優紀 (2012/11/7) 京都大学学術出版会
- ・台湾文学と文学キャンプ—読者と作家のインタラクティブな創造空間/赤松 美和子 (2012/12) 東方書店

■ そのほか

□ 関東部会春季修士論文報告会

恒例となりました関東部会春季修士論文報告会を下記の日時で開催いたします。

日時：2013年5月11日（土）／場所：法政大学

□ 関西部会大会

6月8日（土）に龍谷大学セミナーハウス「ともいき荘」にて開催予定（詳細未定）

□ 西日本部会研究会

5月に開催予定（詳細未定）

□ 東海部会大学院前後期博士課程在学生報告会

6月に開催予定（未定）

=====

日本現代中国学会事務局

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22

大学生協学会支援センター内 日本現代中国学会事務局

TEL:03-5307-1175 FAX:03-5307-1196

genchu@univcoop.or.jp 郵便振替:東京 00190-6-155984

広報委員長：大澤武司（熊本学園大学）

ニューズレター編集：福田円（国士舘大学）

日本現代中国学会 HP: <http://www.genchugakkai.com>

=====